

## スライド考

五十殿利治

芸術学系助教授

高校生の時代はまだオープン・リールが全盛であったが、しばらくするとカセット・テープがこれを駆逐し、いまやMDの時代を迎えている。これほど技術革新が加速されると、予言はまるではやらないだろう。とはいえ、自分に関係する教育機器の将来については、もとより教える側の都合だけで対応できるはずはなく、場合によっては、喫緊の事態として迫ってくるという意味で、確かな予言をお願いしたいという心境にもなるというものだ。

### その日はいつだったか？

研究室にワープロが、そしてパソコンがはじめて入ったのはいつのことか、はじめて電子メールを使ったのはいつのことか。すべて当たり前になってしまうと、そもそもの始まりを思い出すことすら難しくなる。

それでも、記憶が曖昧であっても、研

究にとってのIT革命なるものの意味を考えるのは、さほど難しいことではない。研究というものには目標がはっきりしており、そのためになにを手段とすべきかも自ずと割り出される。その点でツールとしての情報機器は大いに活用できる。

むしろ、反対に、この「革命」を傍観したり、これに逆行する研究者もいる。個人研究であれば、共同研究者との歩調を合わせる必要もない。コンピュータなし、電子メールなし、でも十分に研究活動は可能なのである。

ところが、教育となるとそうはいかないだろう。相手があり、相手の理解があってはじめて意味があるのだから。

### スライドと学会発表

自分の専門分野の教育機器といえば、まずスライドとスライド・プロジェクターがある。現在のところ、美術史の授

業をスライドなしで済ますことは難しい。もちろん、映画やパフォーマンスが20世紀美術史に重要な表現媒体として登場してくるのだから、それに対応した機器（たとえば、ビデオ・プロジェクター）も不可欠とはいえ、そもそも比重が違う。スライドは今後どうなるのか。教育機材としてのスライドは生き残るのか。

まず、学会関係の研究発表という面では、スライドはいまだその面目を保っている。昨年5月、本学大会館で美術史学会全国大会が3日間にわたり開かれたが、ビデオ・プロジェクターを用いた発表者はただ一人だけであつた。また9月にロンドンにおいて開催された第30回国際美術史学会大会では、セッションの数が多くて、すべての発表を聴講することはもとよりできなかつたが、やはりスライドがいぜんとして活用されていた。

## 故障する

ただし、「デジタルな美術史の時間」のセクションは別であったようである。あるメーリングリストによって配信された一参加者の報告として、機器が故障したというものがあつたように記憶している。皮肉なことだなという印象を覚えたからである。だが、実は、故障は他人事

ではなかつた。昨年の美術史学会全国大会でもスライドの故障があつて、発表者にも、参加者にも迷惑をかけてしまった。かくいう私が司会を担当した第一日午前中の部であつた。厳しい時間制限のある発表なので、予備のプロジェクターが動き出すまで気が気ではなかつた。

ある大学の美術史学科では、いまだに手差しのプロジェクターを使用している。なにしろ故障に強いからであるという。壇上で冷や汗をかいた自分の経験に照らしてみれば、なるほど道理である。ランプが切れるということはあつても、すぐに対応できるし、スライド・トレーを入れ替える必要もない。

故障は起きる、だからすぐに対応するということから発想すれば、手動のプロジェクターと電動のプロジェクターのどちらに軍配があがるかは明白だ。

## スライドと美術史学

スライドの問題、あるいは複製技術の問題は美術史という学問の成立にも深く関与しているように見える。複製技術の発展に対して、美術史は「美術作品」への過剰ともいえる信頼によって、学としての存立を保ってきたといえなくもない。美術史を学ぶ人間にとっては、スラ

イドはどこまでも偽りの代替物であつて、それ以上ではないということがくりかえし説かれ、作品を実見することが最優先だと強調される。あたかも、作品という最後の砦に引きこもるかのよう

なるほど作品の実見は得難い経験である。鮮やかな、あるいは鈍い色彩、繊細なあるいは雄勁な筆触にはじまり、署名や年記の判読、画布、絹、紙といった支持体、絵具層や保存状態、額縁、等々、作品が物語ることは多面的である。けれども、実際には、美術史が複製技術なしには学問としての成立しないことは明らかなのである。論文の挿図なしにどうやって美術史という学が認知されるのか。

とまれ、スライド偏重というべき事態は、ひとつに作品偏重の美術史に由来するのである。それゆえ作品から離れるならば、その分だけ美術史の「周辺」に位置するという仕掛けである。スライドによる教育はまさに美術史のなんたるかを自ずと物語っている。

### スライドと情報メディアの空間

断るまでもなく、私は予言者ではないから、今後のスライドの命運を占うことは控えておくほうが得策だろうが、現在のままに推移することがないことは私

も断言できる。

ひとつにデジタル化された情報の流通は、複製図版の世界を変えつつある。いぜんならば、出版といえばモノクロの紙焼やポジフィルムを用意したものであるが、いまやスキャンした画像のファイルをMOに入れて編集者へ送る場合があるようになったし、アメリカの研究者から要請されて、画像データを添付ファイルにして電子メールで送ることもある。

こうした情報空間の出現は、学としての美術史を作品世界から解放する、というか、もう少し乱暴に言えば、引きずり出すかもしれない。しかし、それによって、美術史はより広範な領野をその視野に収めて、教育に反映させることができるのではないか。翻ってみれば、スライドは近代になって公共的な財産としてみなされるようになった美術作品が美術館という施設に収蔵され、大衆化された時代の所産である。作品論と様式論を中心とする美術史的な近代の言説はスライドによって補強されていた。

そして、いまポストモダンの時代となって、スライドの使命は終わりつつあるように見える。美術史の教育もまた新たなツールの開拓を必要としている。

(おむかとしはる 美術史)